

府中市の西に接する日野市、(1)多摩動物公園、(2)高幡不動尊、(3)新選組の関連の史跡・資料館など見どころはいろいろありますが、今回は(2)(3)の散策です。



《日野市散策》

高幡不動の初不動大祭の日が誕生日なので、幼い頃からこの日のお参りは楽しみだった。母と訪れた頃から達磨はここで求めることにしており、帰りには必ずべっ甲飴をせがんだが最近はずっかり見かけなくなった。



今もこの日は、毎年同じように沢山の商店が扱う多種多様なお顔の達磨たちに囲まれて境内を巡るのだが、小さな頃と違っているのは、一緒に歩くのが妻で、昼食時にささやかな誕生会をして、また一つ年をとったと実感することだ。

門前の開運そばでの昼食の後、「新選組のふるさと歴史館」に向かった。入館するとすぐ記念写真の撮影場所があって、新選組の羽織や模擬刀が用意されていた。刀の意外な重さを感じながら、チャンバラポーズで撮影したことが嬉しくて、情けないことに肝心の展示物のことはあまり覚えていない。

次は「日野宿本陣」(写真)を見学。丁度ボランティアガイドさんが、歴史や建物の細かい造作など教えてくれて、ただ見ているだけでは気づかぬ所も判り、とても楽しく有意義な時間を過ごせたので、本陣の建物がとても身近になったように感じた。新選組のことをもう少し識ってから、再訪しようと思う。(竹村 稔)



《日野宿本陣》

天気もまずまずのなか、高幡不動尊から坂の多い感じの日野市をいくつか巡って日野宿本陣に着いた。資料には都内に残る唯一の本陣建築とのこと。立派な門構えの先に本陣が建っていた。観光ボランティアの方にとっても丁寧な説明をしていただいた。資料を見て建物を見学すると違い当時の様子が想像できていい時間を過ごせた。

中でも鴨居にある釘隠しの形は部屋ごとに違いがあった。菊のような「変わり八つ剣菱」「コウモリ」「つがいのうさぎ」など。一説には「コウモリ」は幸盛りや幸守りという当て字で表現される幸福の思い。「つがいのうさぎ」は子孫繁栄の意味もあるとのこと。職人さんや当主の方々の思いが込められているのだろう。解説があってこそ収穫だったと思う。(辻 麻美)



《編集後記》

本紙 4面「ふちゅう東西南北」のコーナーで連載中の「隣接市を訪ねて」、今回の7回目で府中市と境界を接する市は全て訪ねました。各市とも広く学びのポイントも様々で十分にご紹介できませんでしたがまとめて Web に載せました。ご覧ください。記事は編集のメンバーが実際に散策して書いています。みなさんもやってみませんか、楽しいですよ。ワイワイガヤガヤ、ぜひ！(西谷信昭)

新メンバー募集中！問合せはメールで ⇒



《八十八ヶ所巡り》

高幡不動尊は、京王線高幡不動駅で下車するとすぐ参道に続く鳥居が見えます。少し歩くと山内八十八ヶ所巡拝路入口の立看板があります。なぜ高幡不動尊に四国八十八ヶ所を模した「山内八十八ヶ所巡り」があるのか疑問に思い調べてみました。

明治42年(1909)池田金太郎ほか7人の発願により四国八十八ヶ所霊場にちなんだ弘法大師の石像88体が寄進されました。1~88番の札所に見立てた石像をお参りし、最後に大師堂前で「お砂ふみ」をすれば八十八ヶ所を巡礼したのと同じ功德(くどく)が得られるとされています。

御朱印はいただけませんが健脚な方なら1時間ほどで回れます。6月、7月の季節なら紫陽花が一面に咲く中を歩くようになっています。

一度訪れてみてはいかがでしょうか。(井口文江)



《鳴き龍》

高幡不動尊の大日堂で鳴き龍を見学し、細かいビートを刻んだ響きに感動した。これは体感してこそその感覚だった。

強く短いビートは、ロックを感じさせてくれた。この仕掛けはどうなっているのか？天井を見上げると中村岳蓮の迫力ある龍の絵があるが、薄暗くて良く見えない。四隅には木材を組み、寄せ木みたいなのがついていて。強く手を叩くと音が反射を繰り返して細かいビート音に成るようだ。



ちなみに、日光東照宮にも泣き龍があるが鈴のようと言われている。日本全国色々な所にあれどロックを感じさせてくれるのはここだけかも。いかにも聞き届けた様に答えてくれる泣き龍。現代版のお告げを聞いてみてはいかがでしょうか。(山田詩子)

《新撰組 鉄の掟》

農民から武士になり英雄視される新撰組であるが、武士よりも武士らしくを意識して、近藤勇と土方歳三で定めた局中法度と言われる鉄の掟をもって隊を統括したという。

- 一. 士道に背きまじきこと
  - 二. 局を脱するを許さず
  - 三. 勝手に金策いたすべからず
  - 四. 勝手に訴訟取り扱うべからず
  - 五. 私の闘争を許さず
- の五箇条から成る。

血気盛んな若者を統べるには厳しさが必要であったと思われるのだが、新撰組の死亡者約50人のうち、半数はその法度に違反したとして切腹または肅清(斬殺、斬首)された者と言われる。

新撰組への思いは人それぞれだが、歴史の出来事には表も裏もあることを痛感する事実だ。(小林清次郎)

